

# 東海の古代

## 第276号 2023年8月

会長 : 畑田寿一  
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

### 『隋書』が記す「嫁が夫の家に入るとき必ず火を跨ぐ」とは —宮市 畑田 寿一—

『隋書』には題記の不思議な記述がある。筆者の地方にはその様な風習は無く、長年謎であった。しかし、関東地方に於いて戦前まで同様な風習が残っており、1300年以上の歴史があることを最近知った。今回はこの風習を中心に、渡来人との関係を探ってみたい。

#### 1 『隋書』が述べる婚姻の風俗

『隋書』には倭国の婚姻風俗について、次の様に書かれている。

- ① 女多く男少なし。
- ② 婚家には同性を娶らず。
- ③ 男女相悦ぶ者は即ち婚を為す。
- ④ 嫁、夫の家に入るには、必ず火を跨ぎて、乃ち夫と相見ゆ。
- ⑤ 婦人は淫妬せず。

(出典：『倭国伝』講談社学術文庫、2010年)

「女性の方が多い」の記述は『魏志』倭人伝での「多くの家では奥さんを四、五人娶っている。」から発展した記述で、一般には中国の歴史編者の誤解とされているが、中国の巷でその様に思われていた節がある。「婦人は淫妬せず」も古くから言われていた。

「男女相悦ぶ者は即ち婚を為す。」は恋愛による婚姻が多いことを示し、女性が家に縛られていない状態を暗示する。

問題の、④の火を跨ぐ行為は、狐など化け物が家に入り込むことを避ける意味としている文献もあるが、もう少し理由があるように見える。

#### 2 関東地方の風習

江守五夫氏（元千葉大学名誉教授）の著書『婚姻の民俗』（吉川弘文館、1998年）に拠れば、婚礼時に関東各地で火を跨ぐ風習が近年まであった。

地 方	風 習
茨城県生方郡	手伝いの人が庭に篝火をたき、嫁はそれを跨いで入る。
埼玉県入間郡	婚家の門口で篝火を跨ぐ。
群馬県前橋市	豆木を炊いた庭火を跨ぐ。
東京都多摩市	ワラの松明を跨いで入る。

更に、同様の風習は秋田県、神奈川県、長野県、新潟県のほか、九州では福岡県、熊本県でも見られたと記述されている。

### 3 外国での風習

上記の風習は研究の結果、ツングース系民族の共通の風俗と考えられている。

ツングース系民族は主に中国の北部とロシアのシベリア地域の分布しており、日本では女真族（満族）が有名であり、シャーマニズムを信仰していた。

これらの文化は高句麗、扶余に受け継がれて日本に到来したと思われる。

### 4 5世紀の馬の飼育「牧」との関連

大林太良氏（元東京大学名誉教授）は、馬の牧場「牧」と火を跨ぐ風俗との位置関係が一致することから、牧の従事者をツングース系渡来人としている。しかし、拙考「東海の古代」273号の「馬の古代史」で示したように、渡来人が関わった5世紀後半の放牧は黒ボク地帯で行われており、南九州などの地点が抜けることや、飯田地方の遺跡から伽耶系のカマドなどが出土することから、一概にツングース系と断定できるか疑問が残る。『隋書』（7世紀）の頃には牧の形態も変わり高句麗人が中心の社会になったのかもしれない。今後の研究課題であろう。

ちなみに、5世紀後半の牧と火を跨ぐ風習のある地方を図1で表すと次のようになる。

<図1>



<図2>



### 5 長野県の渡来人

関東地方の渡来人については多くの資料があり、高句麗系の村が存在することが知られているが、信濃の国については多くを語られていない。上記の疑問を解くヒントにならないか信濃の渡来人を眺めてみた。

図2の分布図で、高句麗系渡来人の分布と火を跨ぐ風習の地域は一致しており、高句麗系の風習であることが分かる。また、右の『続日本紀』の渡来人の改姓記事では、近年渡来した渡来人を土地に定着させる目的で姓を与えていると思われるが、科野友麻呂など信州の渡来人が多く混じる。

続日本紀(761年)が示す姓を賜わる渡来人	
百済	1 3 1
高句麗	2 9
新羅	2 0
中国	8

## 6 まとめ

以上、関東地方の風習とともに、5世紀から8世紀に到る時代の渡来人の様子を眺めてきた。全体を纏めてみると次のことが言えるのでは無いか。

- ① 5世紀の倭の五王の時代になると倭国も朝鮮半島諸国に対応できる軍事力を持つようになり、馬や甲冑の需要が高まり、これに伴い渡来人が急増した。  
倭国は渡来人を比較的土に余裕がある信濃や毛野に送り、流入に応えた。
- ② 6世紀の継体天皇の時代になると朝鮮半島南部の緊張が高まり、倭国の既得権の「任那」を巡り争いが増した。倭国は親百濟政策に傾き、新羅との争いに巻き込まれるが、最終的には「任那」を放棄した。この時、東国の渡来人の軍事力を利用し、結果的に東国の勢力が無視できない程になった。
- ③ 7世紀に入るとヤマト朝廷と中国との外交が始まり、中国や朝鮮半島の知識人が本国とヤマトとの間を行き来するようになった。  
天平宝字5年(761年)の記事にあるように、新羅が朝鮮半島を統一後は各国の亡命貴族が東国に住み着き、異国の文化の花を咲かせた。
- ④ 自然現象を神の行いとする「シャーマニズム」の発祥地を先考文献ではツングース族とされているが、日本では縄文時代から行われており、自然発生的原始宗教の様相が高い。火山噴火、地震、水害など人に被害をもたらす要因は多いが、モンスーン地帯でもあり、数年で復帰する。これが災害を神の懲らしめと捉え、神と会話できる女性の地位を高めた。  
日本起源はツングース族など北方とする説と長江など南方とする説に分かれるが、いずれにも課題があり、断定し難い。
- ⑤ 火を神聖なものとして崇め、処女性を重んじる行為が、扶余あたりの風習と混ざって近年まで行われていたことは驚異に値する。  
中世において女性は貴重な労働力であり、大家族に於いて家事や農作業は長老の「刀自」が取り仕切っていた。一方、性風俗は「夜這い」などが示すように比較的自由奔放であった。嫁入りに際して過去を洗い流す行為として、火を跨ぎ煙に燻される行為が存在したのでは無かろうか。

## 古代豪族・中臣氏のルーツを探る

東海市 大島 秀雄

### 1. はじめに

中臣氏は藤原鎌足や有力公家、有力神社の祠官家しかんを多数輩出したことで有名ですが、中臣氏の祖である天兒屋命の職掌は骨トこつぼくであったとされていますので、確たる史料は無いものの占いを切り口に中臣氏のルーツを探ってみたいと思います。

### 2. 中臣氏と占い

中臣というウジは、宮廷祭祀機構の整備に伴い欽明朝頃に初めて中臣職が創設され、欽明朝に連のカバネを賜った中臣連鎌子が中臣氏の初見ではないかと思われま。

中臣氏のウジの由来としては『藤氏家伝』上に、「世掌天地之祭、相和人神之間。仍命其氏曰大中臣。」とあり、また『群書類従』に所収の「中臣氏系図」の糠手子大連の箇所には、「高天原初而。皇神之御中。皇御孫之御中執持。伊賀志梓不傾。本末中良布留人。称之中臣者。」とあるので、皇神と皇御孫(天皇)の中を取り持ち、神意を伝えることであつたと解釈されます。

また、『古事記』の「天の石屋」の段に中臣氏の祖である天兒屋命は鹿の肩甲骨を焼きそのひび割れによって占う骨トを専門ふとまににしていたとされ、『日本書紀』神代下第二の一書に天兒屋命は神事の元締の役であり、太占（骨トのこと）の占いを役目として仕えさせたとあるので、中臣氏の主要な職掌としては占いにより天皇家の相談役を務めていたと解釈されます。

『日本書紀』欽明天皇14年（553年）6月の記事ではト書を百濟から求めたという記述があるので、実際にはこの頃が日本古来の動物の骨による骨トから中国伝来のまほく亀トへの転換点ではなかったかと思われます。

### 3. 松尾社家伊伎氏の系図

『続群書類従』に所収の松尾大社の社家ト部伊伎氏の「松尾社家系図」によれば雷大臣命は、中臣、大中臣、ト部、伊伎、藤原等の初祖也とされ、仲哀天皇の時代に亀トの業をもって中臣からト部に改姓したとされますが、実際には古墳時代後期から亀トが国家の祭祀となり、ト部と呼ばれる品部（職業集団）が占いに従事していたのではないかと考えられています。

『延喜式』などによれば、ト部は対馬・壱岐・伊豆の三国から選ばれることになっており、また対馬から10人、壱岐・伊豆から各5人を選ぶことが規定されています。

これを三国ト部と呼び、また中央に進出した京ト部も含めると厳密には四国ト部とも呼ばれます。

また、この系図では神功皇后の時代に中臣烏賊津連は雷大臣を称し、大三輪大友主君、物部胆咋連、大伴武以連を含む四大夫の中の随一であったとされていますが、この内容は仲哀紀のコピーであり、時代的にも信用できません。

さて、書紀の神功皇后摂政前期に出てくる中臣烏賊津使主については、対馬市厳原町豆殿の雷神社は新羅征討からの帰還後に雷大臣命（中臣烏賊津使主）が邸宅を構えた場所であり、雷大臣命はそこで朝鮮からの入貢を掌り、祝官として祭祀の礼や亀トの術を伝えたという話が残っており、対馬市には中臣烏賊津使主を祭る神社が多数あることから、中臣氏がこの地方に縁があったことがうかがえますが、**系図や神社の言い伝えは亀トの術であり、記紀の骨トではありません。**

従って、記紀の骨トの記述は中臣氏の歴史が古いことを強調するためのものであり、とても史実とは思えませんし、中国伝来の亀トが家業であったとするならば、畿内出身の氏族ではなくて渡来系氏族の可能性は否定出来ません。

また壱岐市には月読神社があり、現在、松尾大社の摂社となっている京都市西京区松室山添町の月読神社は壱岐県主・押見宿祢が神職として奉仕し、押見宿祢の子孫のト部姓が代々神職として世襲したとされますから、社家ト部伊伎氏は伊岐国造の一族とみられます。

天武紀2年12月5日条には大嘗祭に奉仕した中臣、忌部、および神官の人たちと記されているので、この神官がト部に相当するのでしょう。

以上のような事情もあり、記紀（『日本書紀』では別伝の扱い）の神話では瓊瓊杵尊は中臣氏の遠祖、天兒屋命ら五部（五伴緒）を随伴して天下ったという設定であり、また『古事記』では伊邪那伎命の三柱の貴き子として天照大御神、月読命、須佐之男命が挙げられているので、中臣氏や藤原氏が神話の創作に関与した形跡がうかがえます。

ただ、藤原氏の権力や天皇家の権威を持ってしても『日本書紀』の天孫降臨の段の本文には天兒屋命や天照大神が掲載されておらず、また高皇産靈尊が天孫降臨の指揮者であり、書紀の神代下の冒頭には高皇産靈尊が皇祖として登場するので、天照大神は比較的新しい神であった事が分かります。



#### 4. 中臣氏系図と日本書紀の人々

『群書類従』に所収の「中臣氏系図」では、黒田大連公に2男があり、欽明朝に中臣姓の始めとして中臣常盤大連と中臣伊礼波連を挙げ、常盤大連の子には敏達朝の中臣可多能祐大連を挙げていますが、いずれも書紀には出てきません。

そして可多能祐の3男が御食子、国子、糠手子となっています。

『尊卑分脈』の藤原氏系図もほぼ中臣氏系図と同様であり、黒田大連の箇所に「**継体天皇御宇人也**」と注記されています。

さて、『日本書紀』の用明紀までの中臣氏関連の人物を表にしてみました。欽明紀から用明紀に出てくる鎌子、勝海、磐余は、「中臣氏系図」や『尊卑分脈』の系統とは別人の本流とみられ、丁未の役で本流は滅亡したものと思われま。

応神9年条の壱岐直の先祖の真根子ですが、〇〇子が中臣氏の一時期の通称であり、真根子の実在性については疑いがないと思いますが、その時期については何とも言えません。

また、書紀の神功皇后摂政前期9年条には**中臣烏賊津使主をよんで審神者**（神託を聞いて意味を解く人）とされたとの記事がありますが、当時中臣姓が成立していなかったため、中臣祖の烏賊津使主とでも呼ぶべき人物のようですが、この使主とは何を意味するのでしょうか。

応神朝の「**倭漢直の祖阿智使主、其の子都加使主、並に己が党類十七県を率て、来帰**り」とあるのが使主の2番目の例であり、いわゆる東漢氏の渡来時の族長に冠せられた敬称とみられ、この使主の敬称は渡来系の祖名に付されることが多いとされ、『新撰姓氏録』の渡来系氏族で先祖名に使主が付くのは、桑原村主、調連、民首、高田首、日置造、伊部造、末使主、木日佐、桑原直、朝妻造、波多造、鳥井宿禰、栄井宿禰、吉井宿禰、和造、日置倉人、桑原史、火撫直、水海連、調日佐、上日佐、島本、村主、日根造の各氏です。

従って、神功紀や允恭紀に見える烏賊津使主と、仲哀紀に見える烏賊津連は同一の人物とみられることから、どの時代に生きた人物かは特定できないものの中臣氏の伝説的な先祖に設定されたものと思われ、**烏賊津使主は中国伝来の亀トに通じた朝鮮半島からの渡来人**であった可能性が高いものと判断されます。

#### 5. 中臣氏の本貫地

大阪府北部の三島地域は、古代から藤原氏ゆかりの地とされ、大阪府茨木市東奈良一丁目・二丁目の東奈良遺跡付近はさくらぎ沢良宜と呼ばれ、鎌足が隠居した三島別業という別邸があったとされます。

また、大阪府高槻市奈佐原・茨木市安威にある阿武山（標高281.1メートル）の山腹に位置する阿武山古墳は被葬者を藤原鎌足（中臣鎌足）に比定する説があります。

従って、中臣氏の先祖である黒田大連が継体天皇の時代の人であるとされており、継体天皇も今城塚古墳のある三島が出身地であると思われるので、黒田大連が継体擁立に参加してからが王権との本格的なつながりの第一歩であったのかもしれない。

なお、淀川流域の枚方市には津嶋や津嶋野の伝承地があり、寝屋川市には対馬江の地名が残っていることから、中臣氏やト部氏が九州の対馬に往来していた事実を物語っている可能性があります。

#### 6. おわりに

中臣氏の先祖は、日本古来の骨トとは無関係であり、中国伝来の亀トを王権に持ち込むことに成功した朝鮮半島からの渡来人であったと考えられます。

大化改新の功労者である中臣鎌足の偉大さもさることながら、亀トを以って王権に最接近した先祖の存在を抜きには藤原氏の隆盛を語ることは出来ないと思われま。

内 容	出 典
もろもろの神たちは、 <b>中臣連</b> の遠い先祖の興台産霊の子、 <b>天児屋命</b> を遣わしてお祈りさせた。そこで <b>天児屋命</b> は、天の香山の榊を掘りとり、・・	書紀、神代上
天照大神は・・ <b>中臣氏</b> の遠祖、 <b>天児屋命</b> 、・・、全部で五部の神たちを配してつき従われた。	書紀、神代下一書
・・ <b>中臣連</b> の先祖 <b>大鹿島</b> 、・・らの五大夫たちに詔して・・	垂仁紀25年
・・ <b>中臣連</b> の祖、 <b>探湯主</b> に仰せられて占わされた。	垂仁紀25年一云
皇后は大臣と <b>中臣烏賊津連</b> ・・に詔して「いま天下の人は天皇の亡くなられたことを知らない。	仲哀紀9年
<b>中臣烏賊津使主</b> をよんで審神者とされた。	神功皇后摂政前期9年
<b>壱岐直</b> の先祖の <b>真根子</b> という人があり、その容姿が武内宿禰によく似ていた。	応神紀9年
・・舎人の <b>中臣烏賊津使主</b> に詔して「皇后の奉る娘子の弟姫(衣通郎姫)が呼んでも来ない。	允恭紀7年
山背国葛野郡の歌荒櫨田(葛野坐月読神社付近)を奉られた。壱岐の県主の先祖の <b>押見宿禰</b> がそこにお祠りして仕えた。	顕宗紀3年
物部大連尾輿・ <b>中臣連鎌子</b> が同じく申すのには・・	欽明紀13年
物部弓削守屋大連と <b>中臣勝海大夫</b> は奏上して・・	敏達紀14年
ある本には、・・ <b>中臣磐余連</b> が仏教を滅ぼそうと共謀し、・・	
物部守屋大連と <b>中臣勝海連</b> は勅命の会議に反対して・・ <b>中臣勝海連</b> は自分の家に兵を集め、大連を助けようとした。	用明紀2年

## 愛知サマーセミナー2023の講座の状況



- 1 日 時：2023年7月16日(日) 3限 13:10～14:30
- 2 場 所：名古屋大谷高等学校 西館4階 教室214  
地下鉄桜通線 瑞穂区役所下車 4番出口北西へ徒歩4分
- 3 タイトル：教科書が教えない！！真実の古代史 卑弥呼は何処に？
- 4 講 師：畑田寿一、石田泉城
- 5 受 講 者：36名 女30、男6  
(中学女12、中学男2、高校女12、高校男2、一般女6、一般男2)
- 6 感想文

全員から感想文をいただき、そのうち代表的なものをいくつか以下にとりあげました。  
なお、参加者といくつかの質疑がありました省略します。

### ・ 中学 2 年女子

私は今回講座を受けて、邪馬台国は九州北部にあり卑弥呼はそこにいたのだと思いました。『魏志』倭人伝に書かれていることは間違っていないと思うので、そうすると九州にあった説が有力です。

教科書には「九州説や近畿説など邪馬台国の場所のはっきりしていません」と軽く触れられているのですが、この講座で詳しく知ることができました。中国の歴史書などを解読して昔の日本の様子などを考えるのはとても面白そうなので少しやってみたくなりました。卑弥呼の金印が見つければ邪馬台国の場所も決まると思うので、はやく見つかるというと思います。歴史について考えるのはとても楽しいので、これからもっと色々なことを調べたり考えたりしていきたいです。

わかりやすくとても面白い授業をしてくださり、ありがとうございました。

### ・ 中学 2 年女子

卑弥呼について分かっていないことが多く、学校の授業でも卑弥呼のことについてあまり教えてもらっていなかったもので、今回くわしく知ることができ良かったです。

### ・ 中学 2 年女子

私は、まだ中学生で、卑弥呼について深く考えたことがなく、今回を機に邪馬台国や卑弥呼をもっと知ろうという気になりました。

昨年冬休みに福岡で展示されていた奴国の金印を見てきました。私は、奴国の金印と邪馬台国の金印は同じものと考えていました。とても興味深かったので早く邪馬台国の金印も見つかることを願っています。

### ・ 中学 3 年男子

教科書を読んで納得していましたが、この講座を受けて知らなかったことがたくさんあって為になるなと思いました。

### ・ 高校 1 年女子

卑弥呼と聞くと大和の国ぐらいのイメージしかありませんでしたが、こんなにたくさん説があると知り驚きました。

今まで卑弥呼は中国地方にいると何となく思っていたので、九州に居たかもしれないと知り良かったと思いました。とても楽しかったです。

### ・ 高校 1 年女子

今回、真実の古代史の話聞き、小学生の頃に教えられてきた卑弥呼をあらためて詳しく知ることができました。

全国には40箇所以上の卑弥呼がいたとされる場所があり、中にはミス卑弥呼を決めているところがあると知りびっくりしました。

邪馬台国は、本当は邪馬壹國だと『魏志』倭人伝に書いてあると知り、どこから邪馬台国という名称が出来たのか知りたくなりました。

卑弥呼が本当は何処にいたのか、どのくらいの年齢なのかということを知ることができ、もっと詳しく知りたいと思いました。図を使って何余里かを見ることができて良かったです。難しい言葉がいくつか出てきたので家に帰ったら調べてみたいです。

卑弥呼を新たな視点から考察することができ、来て良かったと思いました。

次回も開催されたらぜひ来たいと思います。ありがとうございました。

### ・ 高校 2 年女子

感じた疑問について納得するような説明で、とてもわかりやすく良かったです。

『魏志』倭人伝に書かれている内容が本当なら邪馬台国が九州北部にあるんじゃないか

と思いましたが、もっと他にヒントが隠されている歴史書があったら、より深掘りできて良いのになと思いました。中国だけじゃなく他の国で日本と関わりのあるような物は発見されなかったのか知りたいです。自分が考えつかないような疑問もあり、そのことについて考えるのはとても楽しかったです。

#### ・高校2年女子

ああ確かに！と感じるところがたくさんあり、すごく納得できました！！

卑弥呼や邪馬台国について、ここまで詳しく授業をされることがないので、この講座を受けることができるとても良かったです。

#### ・高校2年女子

学校で今ちょうど古代史を習っていたので興味を持って来ました。

学校の授業の中では卑弥呼のことについてはあまりふれられていないので、いろいろと知ることができて良かったです。

なぜそう思うのかという考えをわかりやすく説明されていて、私も納得し、理解することができました。これからの学校の授業に役立てたいと思いました。

#### ・高校3年男子

卑弥呼が何処にいたのかいろいろな説があって、その説を町のPRに活かしていて面白いなと思いました。古来から倭と中国や朝鮮との関係性が続いているとわかりました。

この時代の歴史書は『魏志』倭人伝しかないけれどもしっかりしたことが書いてあり、それを読むと九州の辺りだとはっきり分かって、とてもびっくりしました。

福岡平野が栄えたために昔の地形が変わり遺跡が残っていないと知りとても残念です。いろんなことを知ることができるとても勉強になりました。

#### ・一般女性

図書館に置いてあった愛知サマーセミナーのパンフレットを見て、タイトルに惹かれて受講しました。邪馬台国の所在地はここだという話が面白かったです。福岡辺りにあったというので納得です。

#### ・一般女性

本日はありがとうございました。娘の付き添いで聞きましたが、たいへん勉強になる話でした。

#### ・一般男性

卑弥呼の冢は円形と確信した。福岡平野以外に想定できない。

#### ・一般男性

全ての人知っている卑弥呼について、様々な説があることを初めて知った。

定説があったとしても、なぜかと疑問を持つことが重要であるとの言葉に感心した。

楽しく講義を受けることができました。ありがとうございました。

#### 前回の例会の話題

- ・卑弥呼は何処にいたのか 一宮市 畑田寿一
- ・卑弥呼の痕跡 名古屋市 石田泉城

#### 例会の予定

- 1 日時 8月20日(日)13時半～
- 2 場所 名古屋市市政資料館

日曜日開催!

#### ■ 来月以降の例会 原則土曜日

9/16、10/21、11/18、12/23

#### 会員の投稿について

#### ■ 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)

toukaikodai@yahoo.co.jp

#### ■ 投稿締切り日 8月31日(木)